

# 追憶 (補遺)

花と鳥と歌と

目次

弟「譲」の思い出にと作ったアルバムに添えた姉妹宛の手紙 一九八四年

有坂先生を惜む 土橋 節  
言<sup>こと</sup>叔母ちゃんのことども 堺 万里子

晩春の鎌倉 一九八七年以降

有坂言子様の思い出 石井 敏子

奈良女高師同窓生宛の手紙から 一九八〇年代

有坂言子先生と文雄様 勝見 恭子

御殿場病院の有坂さん 桐谷 綾子

松沢言子先生の思い出 新井美奈子

また鎌倉でお会いしましょう 池田 加代

松沢先生を偲んで 明石 利子

加藤タミ様からのお便り

昭和十四年から十九年の頃 三矢 香織

春日屋延子様からのお便り

邦彦さんと有坂先生 中野ノブ子

磯崎弘子様からのお便り

言子先生の思い出 望月 倫子

勝見恭子様からのお便り

朽木正子様からのお言葉

河内幸子様からのお言葉

参考資料 1

夫磐雄の母敏子より言子への手紙

参考資料 2

従妹の三浦節様からのお手紙

参考資料 3

挽 歌（松沢敬讓）

参考資料 4

示 児（松沢敬讓）

編集後記

弟「讓」の思い出にと作ったアルバムに添えた姉妹宛の手紙

讓ちゃんが逝ってしまつて今年で半世紀、五十年もの歳月が流れてしまいました。毎年秋になる度にそして十月を迎えるたびにゆうちゃんのことを思い出します。去年、父上のアルバムを作りました折、ゆうちゃんのもと思いつきましたが、何分にも資料不足、とても一冊になるとは思えませんでした。

然し、一枚でも二枚でもまた新しく焼いて彼の思い出のよすがにと思い作ってみました。そして父上が決めてくださった竜寶寺の奥の山ふところに抱かれた静かな墓地も写してみたらと思いつき、この秋のお彼岸のお参りかたがたカメラを提げて出かけました。風もない静かな午下がり、お線香の煙がまっすぐに立ち上がってゆきます。

赤と白のお花を手向け、手を合わせて静かに祈りを捧げます。腕白盛りの附属小学校の

たり、また、父上の挽歌（資料3参照）を一字一字書いてこのアルバムに花を添えて下さった英雄さんに感謝を捧げます。それから又お忙しい中から父上の挽歌をコピーをとって送つて下さったあきおばさんに心からなる御礼を申し上げます。

五十九年 晩秋 横浜の片隅で  
有坂言子

## 晩春の鎌倉

鎌倉駅から大通りに出る。大臣山を背に八幡宮の緑色の屋根が朱塗りの社殿と共に見える。二の鳥居から段葛に入る。葉桜が美しく下のツツジが燃える様。左右の町並みを眺めて今日はゆつくりと八幡宮へと歩を進める。付属小の生徒達が三々五々とかけぬけ後から晩春の風が追いかける。源平池の橋を渡ると柳の新芽が揺れている。大銀杏も若葉に被わ

頃の事、そして逗子開成時代のこと、このころはあの腕白はすっかり無くなり、あまり口もきかない少年になっていったような気がします。多分淋しい時だったのでしょう。時折ソルベイジュソングを口ずさんでいた事、芝浦工大機械科に入学した前後のこと等々、かすかにまたはつきりと心の中に去来致します。さきほど迄風もなく寂々とした墓地に山から吹き下ろす秋の風が桜のわくらばをハラハラと墓前に散らし、短くなつたお線香の煙がゆらゆらと動いております。

「去る者は日々にうつし」とは反対に私は歳を取るほどに彼の思い出は日々に新しくなつて参ります。人の世の「これから」という時に忽然として亡くなり、姉として何一つしてあげられなかつた事をお詫びしながら一度静かに墓前にぬかずきました。

今は両親と兄、姉達と彼の地で私共姉妹を見守つていてくれることでしょう。

終わりにこのアルバムを作るに当たり、アメリカ出張後すぐに寸暇を割いて焼き増しし

れ、右手にく樟が赤みを帯びた新芽をつけ聳え立つ。社前より振り向き、由比ヶ浜まで続くメインストリートと広がる町の中心地を見渡す。段葛は八幡前で分かれ、東は幕府の大蔵屋敷跡、浄明寺、朝比奈の切り通しを通過して金沢へ。鎌倉時代は日本の中心地、この道が日本全国につながっていた。

さて、尚綱会々員の皆様が生徒でいらした頃楽しい夢を描いて何度となく通られた段葛を時には思い出し、心楽しい時、悲しい時にこの桜並木を歩かれた思い出の糸をたぐって見て下さい。楽しさは更に楽しく悲しみや寂しさはこの並木の彼方に消え去ることでしょう。晩春の波が打ち寄せる由比ヶ浜に近い思い出の校舎が皆様を待っています。お健やかに。

（尚綱会だより 「恩師のこえ声」より）  
昭和六二年以降

(同窓会の集まりの後に書かれたと思われる)  
奈良女高師同窓生宛の手紙から

やわらかい穏やかな春の光の注ぐ第二の故郷奈良で皆様にお目にかかることが出来ました事は此の上なくうれしうございました。若い日の日々を過ごしたあの寮の辺り、テニスを眺めたスロープの長椅子のあたり、昔の校舎はなくなってしまうても、どこを眺めても思い出はあふれて居りました。

浜さんが心をこめて御待ち下さった佐保会館、そして「共済会館やまと」、色々とお世話様でした。厚く御礼申し上げます。

佐藤先生にお連れいただいた飛鳥の地もすっかり変わってしまいましたが、自然の面影は昔と少しも変わりなく、耳成も畝傍も、そして天香具山も昔のままの姿で私共を迎えてくれました。

この三日間、老いの身も忘れ、身も心も軽やかに昔と変わらない足取りで歩くことが出来たことは真に感謝の至りでございます。

## 松沢言子先生の思い出

鎌倉高女 三十回卒業生 新井美奈子

鎌女で松沢言子先生の講義を受けましてから早六十年経ちますので、お教室内の毎日はいろいろと懐かしい思い出があつた筈ですのに、記憶からは大部薄れてしまいました。

他の先生方は大抵お着物でしたが、既に中々にセンスのよいスーツをお召しになり、スタスタと足もお速く、登校中の私どもはいつも追い越されて慌てて後からお早うございますと申し上げる始末でした。

教えていただいた地理歴史は私も大好きでしたが、その後の生活の中に何かと役に立っていることを少なからず感じることでございます。

外国映画が好きで、時折授業中にご覧になったストーリーを話して下さいましたが、そのときは一段とお目を細めて、うっとりとした空を眺められるロマンチックな

た。 たった一枚ではございますが、写真お送り申し上げます。何卒お受け取り下さいませ。

さて、来年はこの奈良盆地と同じ地質時代に生まれた上野盆地の中心、上野の町でお目にかかりましょう。奈良とは又、すっかり違つた歴史の面影が皆様方をお迎え申し上げることでございます。そして愛川さんのお骨折りできつとどんなにか皆様方にご満足いただけることかと存じます。どうかそれ返くれぐれも御健康に御気を付け下さいますように。

かしこ

四月十日

有坂こと子

一面をお見せ下さいますので、一同静まり返つて勉強の時より熱心に耳を傾けてしまいました。

ご逝去の少し前にお見舞いに伺いました折、鎌女のことにお話を向けたら途端に驚く程生き生きとなさつて、それはそれは嬉しそうに、「本当に懐かしい」と昔と同じお笑い声をお立てになり、ニコニコとなさいましたので、先生と鎌女の繋がりの大きさを感じました。

## 松沢先生を偲んで

明石利子

テレビアのホームにいらつしやると伺い、楽しみにしておりましたのに果たせず、先生は静かに逝かれてしまわれました。清らかなお花にかこまれて、かつての先生の面影そのままの御遺影がにこやかにかたりかけていらつしやるような、心あたたかなお別れができ

ました。

鎌女の二年から三年一学期は戦中で休校の後、秋になって学校が再開された朝、松沢先生が校門に出られて、「さあ、皆いらつしやい、いらつしやい。」とにこにこ手を振って生徒達を迎えてくださったのが何よりも印象深くのこっているとお友達の伊東さんはおっしゃっていました。

私は地理の授業が忘れられません。チグリス、ユーフラテスから始まって、スイスでもフランスでもオランダでもまるでそこへ行つて見てきたかのような先生のお話に私までそこにいるような思いにさせられ、いつのまにか時間が経ってしまう、そんな楽しい授業でした。

生徒時代はことさら考えずに過ごした日々が、卒業して年を経るごとに先生の暖かさやさしさがなつかしく思われるようになりました。卒業二十五年の同窓会の折のおみやげに夾纈染のスカーフを差し上げたそのお礼状に「胸もとにつけてはなやいだ若々しい気分です。授業をしております。」とそれはそれはうれ

の中で、お洒落で素敵なスーツ姿の先生は、グリーンの君と憧れの的でした。戦争が激化し、モンペ時代となり、体操の女の先生と共に防災班長となり活躍されました。右手に四角い革靴を振る様に、右肩を少し落とし足早に浄明寺から四キロ程を、徒歩で通勤されたのはお嬢様だった頃のこと。お若かったのだ。公平で生徒を対等に扱って下さった本当に心のお優しい立派な精神力の持ち主の尊敬に値する先生でありました。

## 邦彦さんと有坂先生

中野ノブ子

有坂先生とお別れして早三月、鎌倉も桜の季節を迎えました。

遠くへ行かれたはずの先生が、日を追って益々身近に感じられる不思議に戸惑っております。

「ご縁あって、先生のエッセー集「追憶」を

しさあふれるお葉書をいただき、先生のなつかしいお姿を思い浮かべたのでした。

沢山のおやさしいお子様方やご家族の皆様にお困まれているなんてお幸せな先生でしょう。

平成十六年一月

## 昭和十四年から十九年の頃

三矢香織

绰名はなく常に微笑を浮かべ、静かな先生でした。昭和十四年の夏休みに熊本を訪ね、序に台湾に嫁いだ生徒を見舞いに旅され、当時は船旅ですから吃驚しました。内台結婚の生徒を思うご心情に感動しました。また、西洋史の試験にも出たチグリス・ユーフラテスの事、現在の彼の国情と思い合わせてまさに歴史を感じてしまいます。地歴の授業は脱線して映画の話となり、ベルが鳴っても終わらず、皆楽しんだものです。袴姿の先生ばかり

拝読させていただきました。そこには私達が存じ上げる有坂先生を大きく超える有坂先生がおいでになりました。

地質学の専門的な知識、茶道の心得の会得、そして紀行文のすばらしさ等、感動の連続でございました。

又、お子様方への限りない慈しみのお心には、子を持つ親としての共感以上のものを感じました。

先生は、お若くして五人のお子様がいられる有坂様の許に嫁がれ、同時にお母様となられました。その中のお一人、邦彦さんについて、ご紹介させていただきます。

邦彦さんは小学校一、二年生の折、私の妹と同じクラスでございました。妹の話によりますと、邦彦さんは稀に見る秀才でいられたということでございます。

有坂先生は邦彦さんの授業参観日に出席されていらつしやいました。生まれただけのかわいさ赤ちゃんを抱っこされ、和服をお召しになって出席されたこともございました。

当時、私も第一小学校の教師をしておりま

して、お幸せそうなお美しい先生にお目にかかることが出来ました。

先生は鎌倉女学院の先生から、輝くような若々しいお母様に変身されていられました。

邦彦さんは二年生のいつ頃からか入院されまして学校は欠席が続きました。当時、クラス一同で邦彦さんにお見舞い文をお届けしたこともあったようでございます。私の妹は、その時の下書きの絵と文を、実に五十有余年小さなボール箱に入れて手元に置きました。

『ありさかさん、おびょうきはいかがですか。わたしたちは、ありさかさんがいつくるかいつくるかまっております。』

一人でもおやすみがいるとさびしくて、さびしくてたまりません。

はやく、おびよきをなおして学校にきてください。おからだをたいせつに。』

さようなら』

というものです。

当時の担任でいられた依田いとこ先生や、

とても大人びた絵でした。私は家に帰って、そっくりの絵をまねして描きました。ご家族の方が栄養のために牛乳をとってあげていたのかも知れませんが、当時は大変なことだったと思います。

告別式の時はクラスから何名かが、お焼香に伺いました。遺族の方々がとても悲しそうだったことを覚えています。

その中で、「ママ母」と思っていたお母様が眼を真っ赤に泣きはらして、一番悲しそうにしていらしたことが、私の思惑違いであったことを知り、印象に残っています。』

邦彦さんの牛乳の絵については、私も初めて伺いましたが、有坂先生と邦彦さんの当時のご様子を知る大切なキーポイントであったことに気がつきました。

バツクのグリーンは先生の色、そして貴重な牛乳は、邦彦さんがお元気になるために大切な心と体の支えであったと思います。邦彦さんはグリーンというお母様の愛情に包まれ、貴重な牛乳を頼りにして、どんなにかお元気

平田恵子先生から、邦彦さんがどんなにいい子で、優秀であったか、お見舞いに伺った時のご挨拶がどんなにすっかりされていたか、承っております。

しかし、最近になって当時の二年生のクラスのお友達から思い出を伺うことが出来ました。次はお友達Kさんからの手記でございます。

『還暦の頃、鎌倉でクラス会がありました。その折、何と有坂さんのことが話題に出ました。それほど有坂さんは存在感のある方でした。健康になられ、長生きされたら、すばらしいお仕事をされるすてきな男性になられたのではないのでしょうか。残念です。』

私の記憶では眼がくりっとしていて、知性を感じさせる方だったこと。多分、お身体の弱い分、本をよく読まれていたのではないのでしょうか。絵がとてもお上手で、私はとても尊敬していました。

緑色のバツクに白い牛乳びんの絵を憶えています。びんのまわりに赤い色を置いたりし  
になりたいた願われていたことでしょう。

大勢のお子様のお世話にお忙しいお母様に一番可愛がって欲しいと心を寄せられていたのかも知れません。

幼い邦彦さんがたった一人で見知らぬ遠い世界に旅立たれる日、先生は邦彦さんのことが不びんで、不安で、しのびなくて、一緒に  
について行ってあげたい程悲しかったのだと思います。

七人のお子様方お一人一人のドラマをしつかり支えられながら、先生の子育ては立派に終了されました。

先生のエッセーにもございました一期一会のお茶会。そしてお茶会が終了後の余韻、それが残心でしょうか。残心は宴のあと、常に訪れる境地かも知れません。

先生は、ご生涯の晩年を人生の残心のときとして、邦彦さんと心おきなくゆつくり向き合い、安らかにお過ごしになられたのではないかと存じます。小学二年生の邦彦さんの視線で、お若く美しいお母様がほほえまれるこ

様子を思いつつ、拙いペンを置きます。

## 言子先生の思い出

望月倫子

昭和十四年秋から二年間、松沢先生のお宅にお世話になった姉と私は、先生の隣のお部屋を拝借致しました。毎朝キッチンと行動される先生とは別行動で、私達はよく走り出していました。

日曜日になると先生は、一週間分の絹のスーツキングをお洗濯なさってそれがヒラヒラとお隣の縁側にひるがえるのが常でした。當時まだナイロンはなくて、絹ですから、とても大事にしていらして、仕立てのよいキツカリしたスーツと共に、先生らしいおしゃれの基本を私は見せていただきました。外国映画がお好きだった先生がとつていらした大版の映画雑誌「スタア」を見せていただくのがとても楽しみで、俳優は勿論、監督や批評家な

どもそれで覚ええました。

「追憶」(花と鳥と歌と)お送りいただき拝読しましたが、浄明寺の地形を書いていらっしゃるのをとても興味深く読ませていただきました。昭和六十二年頃、万里子さんの提案で、折々横浜駅西口で昼食を一緒にしました。言子先生、敬小母様、万里子さん、私、そして或る時は小百合さん、又私の弟正光が同席させていただくこともありました。そんな折、当時私どもの妹が住んでいたチリが話題になり、(多分サンチャゴは標高千メートルにあるのに、海岸線まで案外近い等)ガヤガヤ話していましたが、先生が一言、「あそこは「褶曲山脈だから」とおっしゃいました。「流石は地理の先生」と弟が感服、私もその時の先生の静かなニコニコなさったお顔と共に、忘れられない思い出になっています。

御殿場で散歩のお供をしました。が、あそこでもきつと富士火山系のことを考えていらしたことでしよう。

鎌女の級友新井さん(宝戒寺隣の新井医院には松沢家の皆さんがかかっていらっしやいま

した。)と一緒にテレジア病院に伺った時、はじめのうちは唯にこにこしていらした先生が、新井さんとの会話でだんだん“先生”になられ、校舎の話にもなり、鎌女の先生と生徒のムードでお別れました。私達は外のベンチで、しばらく七里ヶ浜の海を眺めてから帰りましたが、それから間もなく本当のお別れになってしまいました。

## 有坂先生を惜む

土橋 節(尚綱会会長)

鎌倉の町も桜が散り、ゴールデンウィークを前に、束の間の静けさを取り戻しました。私のまわりも落ち着いた時間が流れるようになり、前からおたのまれしていた、有坂先生への惜別の文をやつと書くことが出来ました。今年の一月の初め、小学校時代から、仲のよい堺まり子さんから、有坂先生のご訃報がもたらされました。私は悲しみと同時に、確

実に私の中で一時代が終わってしまったといふ思いにとらわれて、深く瞑目したのでした。この世に恩師と呼ぶ方が、すべて鬼籍に入られた寂しさは、たとえようのないものです。

一月四日、有坂先生の「お別れ会」に出席させて頂きました。今まで私を暖かくお導き下さったことに、心からの感謝を申し上げることが出来ました。

淡い色彩の花に囲まれて、ほほえんでいらつしやる先生の御遺影を拝しながら、司祭様の心にしみるお話をお聞きし、この「お別れ会」が有坂先生らしい、洗練された、静かで、美しい格調の中で執り行われ、家族の方の細やかなお心遣いを深く感じました。

思えば、有坂先生と私は、先生と生徒という関係よりも姪御さんにあたるまり子さんの「言(こと)おばチャマ」としての部分が、より多かつたと思います。

小学校の頃、まり子さんの広い浄妙寺にほど近いお家に遊びに伺い、カクレンボをしている中に、奥のお部屋にまぎれ込んでしまいました。そこには、お目にかかったこともな

い、立派なおひげのおぢい様が静かに、石臼をひいていらつしやいました。

突然あらわれた、小さな女の子に驚かれたようでしたが、静かに「誰」とおっしゃいました。私は「まり子ちゃんのお友達です。何をしていらつしやるの？」と云いました。

「お茶席で使ふお茶を引いているのですヨ。やってみますか」とおっしゃって下さいました。私は「ハイ」と云いながら、おそばに寄つて、手をとつてお教え下さつた通り、石臼を動かしながらお手伝いをさせて頂いたものでした。その時いただいた、引き立ての香り高い一服のお茶の味は、今でも覚えていように思います。その方こそ有坂先生のお父上様で、大変にお偉い方だと、私は後年になつて知りました。

それから幾年か後、鎌倉女学院に入学してからは「言オバチャマ」ではなく、先生として私の前にお立ちになりました。

ハイカラで、お話がお上手で、殊に外国に關することもよくご研究で、ふんだんにエピソードを織り込んだ御授業は、本当に楽しくか

許していただけのならば、御結婚なさりお子様をお育てになつて、今まで持つていらつしやつた魅力に、深みと慈味が加わつたお姿が忘れられません。

その後、私が女学院の同窓会に關係させていただくようになると、恩師でいらつしやるのに私をたてて下さり、色々お心遣いをいただきました。尚綱会（同窓会の名称）の事も陰になり日なたになり、助けて下さつたことは大変ありがたく忘れられません。

だんだんとお年を重ねられても、いつもシヤツキリとしていらつしやいました。

その後御殿場の病院に入られ、鎌倉七里ヶ浜の病院に御転院になつたことを伺いながら、昔のお元氣だった先生の面影が離れず、お目にかからないうちに、とうとう先生は彼岸に旅立つてしまわれました。

まり子さんに伺つと、「ご息様方をはじめ御縁者の方々のお手厚いご看病を受けられ、とくにご三男文雄様はそれはそれはご孝養を尽くされたと伺つております。

きつと先生は、お幸せなご一生を送られた

つたのを覚えています。

グリーンのマフラーにツイードのスーツ姿で、さつそうと歩かれるお姿はとても魅力的でした。

先生は地理と歴史、そして時々英語のお授業を受け持つていらつしやいました。そして私の出自をよくご存じで、横浜が私の祖霊の地であることや、曾祖父の建てたY校の事、正金銀行を創立した時のこともよく話して下さい、先生の異国に対する憧れが実は横浜のエキゾチックな雰囲気につれたことがその原点にあるのよ、と話されたことが今もなつかしく思い出されます。

卒業後はしばらくお目にかかることもなく、先生の御結婚生活のことも、風の便りにお聞きしながら又、十年以上の月日が流れました。その間、先生の御動静はまり子さんから伺うだけで又長い歳月が経つてしまいました。

ある年のクラス会で久しぶりに先生にお目にかかる機会を得て、前と少しもお変わりにならない温顔に接し、時間が一時停止したような感覚をおぼえました。生意気な言い方を

のだと思います。そのすばらしいご生涯の中のほんの一部分ではありますが、私も参加させていただけただけの光栄を心より感謝申し上げます。

又私のような者に思い出を書かせて下さつた堺万里子様にも心より厚く御礼を申し上げます。謹んでご冥福を心よりお祈り致します。

平成十六年四月二十五日

合掌

言<sup>こと</sup>叔母ちゃんのことども

堺万里子

叔母は私の母の妹であつたが、私は両親の協議離婚によつて父を失い、病気で母を失いかけていたので、祖父が「此の子も親が無くては困るだろうから、お父さんの子として育てよう」と云つてくれて養女にしてもらつたのである。その為母親やその兄弟とも兄弟と



なつたのである。そこで祖父のことはお父さま、祖母のことはお母さまと呼び、姉と呼ぶべき人たちのことは自然の關係のままおばちゃんと呼ぶという変な育ち方をした。子供の時のまま有坂の姉をことおばちゃんと呼んで思い出を記してみたい。

私が小学校に入る頃、写真機を買った。言おばちゃんは仲よく遊んでいたちこちゃん（望月倫子さんの妹さん）と私とを撮ってくれた。ポーズを撮る私に自然のままがいいと教えてくれた。名越のトンネルの前でも撮ってくれたが、三脚の上に写真機を固定して、更にながらのぞき込むのだった様に覚えていいる。撮る人が覗くと、撮られる人達がさかさまに見えるのがおもしろいと云って、その時は成川の従兄弟達と一緒に撮ったかも知れないが、一人々々抱き上げて見せてくれて、他の人達にはそのように見えたらうれしいのだが、私は中のガラス板に自分の顔の写ったのが見えただばかりであった。

駅のプラットホームで「電車が来ますから線の後ろにお下がり下さい」と云うのは客

が出てきたりするの。「そんなことも云っていた。

だんだん戦時色も強くなり、祖父は毎日ラジオで戦況を聞き、警防団副団長とか云うものになり、祖母は愛国婦人会、国防婦人会と二つの婦人会に入らねばならず、きつかったらしい。心臓病にかかり、寝込むようになった。

私はもうすぐ女学校だと云うので、英語を教えてもらったが、「Yes, it is.」がなかなか覚えられなかった。

女学校に入った頃は食べるもの、着るものに不自由を覚えるようになり、私共も自作りを女学校で習ったりした。我が家も大変だった。明日食べようと思つて居た南瓜をとられたり、よその人もよく見ているものだ。

祖母が亡くなった時は悲しかった。胸にぽっかり穴のあく思いが分かった。自分の事ばかり考えて居たが、今思うと言叔母ちゃんも親孝行、殊に母親思いであったから悲しかったであろう。女高師に行ったのも全く苦勞の多い母親を助けたいという思いからだつたの

線でなく白線だと教えてくれたし、附属というのは名前でなく、くつついていいるという意味だとも教えてくれた。では何でも知つていのかと、「人は何のために生きて居るのか」と尋ねてみれば「それを勉強するのが哲学よ」と返事され、ぢああ、わけが分からなくても生きていいのだと安心もした。

熱いお茶が好きで夏でも熱いのを飲んでいい。好きな果物はりんご、色はグリーン、集めて居たのはスイス製のハンカチ、たいてい刺繍がしてあつた。

ある時叔母達が集まつて何やら興奮の面持耳をすましてみると「松本たかしさんが『いま一つ椿落ちなば立ち去らん』という句をつくつていらつしやるのよ。うちの椿だと思つワ。」なるほど、滑川沿いの長い竹藪に椿が二、三本あり、犬懸橋近くは事に見事な一本だつた。家の中より外を歩く方達の方が楽しまれた事だろう。今は護岸工事がなされ、昔の面影はない。

「大佛おほぶつさんの小説のモデルは蘭あきちゃんだと思つわ。わらぶき屋根の家からモダンな娘

だから。恐らくその後やつと自分の結婚の事も考えたと思つ。ただ時代がそれどころではなく、学校のこと、家のことで走り廻つて居た。当時の新聞小説「海軍」や「宮本武蔵」が大好きだつた。横光利一も勧めてくれた。そのうち見せてくれた一冊の本は、主人公がお子さんのある所に後妻として行き、苦勞しながらそのお子さん達を育てる話だつた。読後感を聞かれ、「大変だ」と云つと、でも「その人はえらいと思つ」遠くを見るめつきだつた。日ならずして同じような境遇を選んだのには驚かされたが、皆個性的で魅力のあるお子さん達だつたのでうなづけるものがあった。その後、文ちゃん、信ちゃんも生まれて、にぎやかに、邦ちゃんを除いて皆成人して、それぞれ立派になつたのは何よりであつた。

とにかくくまじめ、努力、実行の人であり、身近の人達によく尽くした。疲れたと思つ。最後の何年かは全部の子供達に出来るだけのことをしてもらい幸せだつたと信じている。文雄さん、信雄さんは当たり前であるが、英

雄様、明子様、芳雄様、殊に恭子様には感謝している。先に逝らした明子様はきつと迎えに来て下さったであろう。お父ちゃんと共に亡き方達に平安を。育てて頂いた感謝と共に。

## 有坂言子様の思い出

石井 敏子

春未だ浅い早春、お雛祭りでもあります三月三日、私共の分会の修養会に北鎌倉分会の磯崎弘子様が見えられ体験談をなされました。其の時、有坂様が暮れも押し迫った十二月三十一日にお亡くなりになられたことをお話下さいました。私が有坂様と初めてお会い致しましたのは報恩会という修養会の場でありました。報恩会という会は静岡県教育委員会の正式な認可を得ている修養団体でありまして、全国に四つの地区があり、その一つに湘南地区というのがあります。更に八つの分会に別れ、有坂様は北鎌倉分会に所属しております。

ご無沙汰を重ねておりましたところ、このたびの訃報に接し、残念に思います。

有坂様長い間大変お世話になり、そして多くのことを教えて頂きました。有難うございました。心から御礼申し上げます。

貴女様の残されました足跡には大輪の綺麗な花が幾つも咲くことでございましょう。お疲れ様でございました。何卒安らかにご永眠下さいませ。

## 有坂言子先生と文雄様

勝見 恭子

「追憶」を拝見させて頂きました。慈愛に満ちたお顔が目の前に浮かんで懐かしさでいっぱいになりました。

平成十六年三月二十一日午後九時過ぎ、文雄様からお電話があり、有坂言子先生が平成

れました。私は茅ヶ崎分会の所属であります。人間というものは時に人の気持ちなど考えず、自分の気持ちのみ優先し、我が儘な気持ちを持ちやすく、人を傷つけたり迷惑をかけたりに致します。常に自分の行いを見つめ、反省をし、正しい人間として感謝の気持ちで毎日を送りましょう。そこに幸福が訪れてくるのです。・・・とその人その時持っている悩み苦しみについて具体的に教えて下さっております。心の持ち方、ものとのとらえ方の大切さを教えられております。

明治生まれの有坂様はご自分をよく律し、人に優しく、慈愛溢れる方であられたと思います。私の家が修養会場でありました時、よくお見え下さり、豊富な人生経験をお話下さいました。お話は大変分かり易く、時には机を軽く叩かれるお話の仕方は特徴があり、今も眼前に彷彿として浮かんで参ります。

時はいつしか静かに流れ、気がつきました時は有坂様のお姿が会場であり見かけられなくなっております。体調優れず、外出を控えられていることを聞きました。その後、

十五年十二月三十一日午後十時四十一分にお亡くなりになったと伺い、本当にびっくり致しました。昨年（十五年）九月頃七里ヶ浜ホームへお訪ねした時はとてもお元気で、談話室でここにござれ、小倉先生のお話や鎌女のお話を楽しくして参り、いつ迄もいつまでも手を振って見送って下さったお姿、目に焼き付いて居ります。きれいなホームで色々な絵やお花が飾ってあり、何ですてきな所で、先生はお幸せでしょうと、又お伺いしたいとお訪ねした三人で帰って参りましたの。・・・もうお伺いしてお目にかかる事ができないとは、残念でたまりません。

三月二十七日には、文雄様が、母が残した報恩会の資料があるのでお渡ししたいと仰り、大船駅で待ちあわせをする事になり、磯崎さんと二人、どんな方かしらと胸躍らせて伺いました。茶色のコートを着、黒いカバンを持っていきますとの事でしたので、そういう方を探すつもりで参りましたらすぐに我々を見つけて寄っていらして下さいました。

さすが、東大出の今は東京工業大学の先生

でいらつしやる文雄氏、すらりとした長身にベージュのダスターコートがよくお似合いの素敵な感じのよい紳士でいらつしやいました。お笑いになると先生によく似ていらつしやり、お話の仕方本当にお優しく、あのお母様に立派にお育てになられたご息様に親しくお目にかかれ、お話しさせて頂ける機会を与えて戴け、有り難く本当に嬉しうございました。丁寧にお保存頂いた報恩会の貴重な資料は報恩会の歴史として大切に使用させて頂きます。お墓は瑞泉寺の近くのカトリック墓地の上の方とお伺い致しました。近くお盆のお墓参りに行かせて頂き、これまでのご恩に感謝申し上げます。

## 御殿場高原病院での有坂さん

桐谷 綾子

御殿場高原病院で三年程 一緒に居た池田さんから 電話を戴いて 有坂さんがお

い微笑みとはつきりした口調でお話をして下さい、とても印象深いお方でした。そして、この度、中野様、村田様の伝文を拝読してあやっぱりわたしの想像していた通りの方でいらしたんだと また感懐を深く致しました。ご主人様を深く愛し、尊敬され、お子様方を慈しんでやまないお心、ご自分を厳しく律するお心、読んでいて自然に涙があふれ、五十七頁を一気に読ませていただきました。有難うございました。

お子様方を始め、沢山の方々に惜しまれてこの世を去られたアリサカ言子様のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(平成十六年九月二日)

## また鎌倉でお会いしましょう

池田 加代

「アリサカさん！」

亡くなりになられたことを知りましたのはつい一ヶ月ほど前のことでございます。

そして、お子様方がお母様の思い出としてご本を作られたということをお聞きして 私も是非読ませていただきたいと 池田さんにお願ひし 数日後に手元に頂戴いたしました。「追憶」を手にし 冒頭のお写真を拝見して私がお目にかかった頃よりははるかに若い頃のお写真ですが、少しもお変わりになつていらつしやらないことに驚き、そして慈愛あふれる微笑みと 遙かあなたを見つめていらつしやるような お優しい眼差しに ああこのお顔だと 思わず見入ってしまった。私が初めてお会いした時に引きつけられた 眼差しでした。

御殿場病院に母が入院してこの十二月の初めで早くも十二年を数えます。九十七歳になります。この間、病院で大勢の方々にお目にかかりましたが、何人かの方とは母の見舞い毎に母そつちのけでお話に興じたり、お花をお届けしたりと 楽しい交流がありました。そんな中でも有坂さんは絶やしたことのな

「あつ、いらつしやい。よくいらしたわねえ。」両手をパンと合わされての歓迎。

姑の見舞いに行き、ほんの少し花のお裾分けに伺う。高原病院で有坂さんにお会いした頃、八十歳半ばでいらつしやったのでしうか。小柄で、物静か、迎えてくださるときには福笑いの眼をされて「あーそう、あーそう、良かったわねえ。」と私のたわいのないおしゃべりに付き合ってください。

「有坂さんのお名前なんとお読みするの？」

「コトコ」  
それを伺ったときの私の驚き、いえジェラシィ。なんと可愛らしい、なんと現代的な、そしてなんと個性的。おまけにコトちゃんと呼びしたら古風ですらあります。まさに有坂さんにぴつたりではありませんか。人は名付けられたとき、その名の人生を歩むのですね。

病院の催し物の際には一目瞭然、ああ教師でいらつしやっただなと分かるご挨拶。本当に暖かく立派な態度で臨まれました。

運悪く骨折をされてもいつの間にか在るがまま、いつもの自然な有坂さんに戻っていらっしやる物です。

“心”が強いという事はきつとこういう事なのでしょう。病院からの帰り際、「アリガトウ！」と語尾強くまるで男性の口調のように言ったださる。私は応援をされている気分です。「又来ますネ。」新たに勇気を頂いてバタバタと帰途につくのでした。

ああ懐かしい。有坂さん、お会いしたい。

鎌倉にお茶の稽古に通う義姉がおりますので“追憶”を送らせて頂きました。すると偶然にも先生のお住居が浄明寺らしく義姉は「今でも古いお店や昔のままの所も残っているのよ。お子さん達にこんなに素敵な本を作ってもらわれてお幸せな方ね。」

嬉しそくに電話をくれました。  
有坂さん、私も紅葉の秋に、桜花の春に“追憶”を片手に鎌倉巡りをさせて戴きますね。  
「あっいらっしやい。よくいらしたわねえ。」

歴史の試験の時(今のように入法ではなくて文で綴るテストでした)、私の解答に不通過は正解なら一重丸ですのに二重丸がある問題についていたのです。その嬉しさは今も忘れません。古典と同様に今も歴史に興味を持ち、歴史の本など買ったがる私です。本当によき師を得たことを私の誇りと致してをります。

先生がダークグリーンのかちつとしたスーツを着られきりつと教壇に立たれたことが今もはつきりとまな裏に焼き付いてをります。髪は後ろに束ねていらっしやいました。昔のママの私を教えて下さった時の先生のままで私の中に刻みつけておきたいと思えます。

当時北海道旅行は今でいふ外国旅行にもひびいてきするものでした。旅のお好きな先生はよく旅をなさいました。特に感動的なのは、美しい「マリモ」を見せて下さったことでした。先生のお好きなピロッドのようなグリーンを忘れません。マリモという詞をきく処に先生が重なって参ります。

浅くはございますが歴史に興味を持てる現

私はほんの少しのお花を持って伺いますからね。

(以下のお手紙その他はお寄せ頂いた方々のご了承を頂きましたので掲載させて頂きます。)

加藤タミ様からのお手紙

(言子の返信のメモによれば昭和六十二年)

松沢先生と呼ばせて下さい。

おすこやかに喜寿をお迎えになりましたことを心より御祝い申し上げます。卒業致しましてはや五十余年が過ぎました。私が先生とお呼びできる方がいらっしやることをとても嬉しく思います。毎年のクラス会にも欠席致し失礼ばかり致して居り申し訳ございません。存在感の薄い私でしたが私の松沢先生の印象は斉藤先生と同じ強烈なものがあります。鎌女時代即お二人の先生です(数理系が弱かったですいで歴史古典が好きでした)。

在の自分のあることは先生のお陰です。良き師に恵まれましたことを改めてお礼申し上げます。

思い出すままに乱筆で記しました。お読みにくいところはご容赦下さいませ。どうぞおすこやかに過ごして下さいを愛知の田舎よりおいのり致して居ります。

十一月六日 加藤タミ(旧姓田中)

鎌女二十五回生)

春日屋延子様からのお便り

花冷えよりも寒の戻りのようなこの二、三日でございます。

有坂言子先生ご他界の御由、心よりお悔やみ申し上げ、深くご冥福をお祈り申し上げます。下つて私、全くプライベートのことで忙殺しておりまして、若しかしたらご連絡いただいたかも知れませんが、認識が足らず本

当に失禮に過ぎまして申し訳ございません。何卒お許し頂けますよう幾重にもお詫び申し上げます。追憶 花と鳥と歌と お送り頂きまして恐縮でございます。重ね重ねのお心遣いに感動いたしております。

先生ご他界の日もまだ浅いのに、よくこれだけお纏めになったものをつくづく心を打たれました。先生の御文章を拝読いたしました。六〇年近くの過ぎた日を思い出してあります。さすがに地理・歴史を専門にお究めになりまして、私共では気のつかないことを詳しくお書きになられて改めてお教え頂いたことがつきました。有難うございました。

亡き夫のことをあのようにお書き頂いたことなど全く存じ上げませんで、改めて何度涙を流したことでしよう。夫、急逝の折、まだ葬儀屋が来てごった返しておりました時、先生が駆けつけて来てくださいました。私は前の晩一睡もしておりませんで何が何やら分からずポーツと部屋隅に坐っております。先生は遺体に向かって合掌され、私の肩を抱いて、「これでよかったですよ。」と言われて

会の折にお話し頂き全員で大笑いしたことがございました。

決している教え子でなく、むしろ先生をいつも困らせたことばかりしていた私ですのにお見捨てなくお声をかけて頂き、身に余るご恩を頂きましたことを今改めて御礼申し上げます。本当にほんとうに有難うございました。同封のものほんの心ばかりで恐縮でございますが、先生のお写真の前にお花でも飾って頂ければ幸甚に存じ上げます。

御遺族の皆様のご自愛をお祈り申し上げます。かっし

三月二十五日

春日屋 延子

有坂文雄様

磯崎弘子様からのお便り

毎日敵しいお暑さでございます。

ました。何で夫の急逝がよかったのか、その本当の意味が分かるまで満三年かかりました。追悼集を作っておりました時、ハツとしました。先生のお言葉は“後の始末をキチンとなさい”という意味だったのです。「夫を残して先立つてはいけない」とは先生が日頃からクラス会の度に仰って下さっていました。「これでよかったのですよ」というお言葉は私が立ち直るきうがけとなりました。本当に有り難く今でも熱いものがこみ上げて参ります。

先生は本当に充実した人生をお送りになつたお幸せな希有のお方でしたね。花作り、鳥たちへの愛情、そして家庭音楽会の団欒等々リーダーシップをおとりになつた御夫君との巡り会い、いつか手作りの楽器の音楽会の放映がN・H・Kからあったことを記憶しております。先生は確か打楽器のような記憶ですが違っておりますかしら。

文雄様はお小さい頃、野球に夢中で好きなチームの選手の名をテストの紙の裏にズラーツと並べてお書きになったことなど、クラス有坂様には益々ご健勝のことと拝察申し上げます。三月末にはお忙しい時間を割いて大船でお目にかかって下さり、色々お話しでき、有坂先生の「追憶」を頂戴致し、誠に有難うございました。その折お話し申し上げました有坂先生の報恩会での活躍のことや長年にわたつてのお骨折りなど、少し先輩の方々に思い出を書いて頂きたいと思いましたが、報恩会で有坂先生とお親しかった方々が皆さん高齢になられ、引退されたり亡くなられたりご病気の方が多く、代替わりとなつてしまいました。このようなわけでお願ひできませんで、どうぞお許し下さい。

有坂先生は小倉遊亀先生を敬愛していらつしゃいまして、小倉先生が北鎌倉女学院で「卒業される皆さんへ」という講演をされた全文が、いただいた資料の中にございましたが、読ませて頂いて、これは是非報恩会の皆さんに読んで頂きたいと思い、早速印刷してお配り致しました。これも有坂先生がよく資料を保存しておいて下さつたお陰と感謝致しております。何事にも熱心でメモ等もよくして

いらつしやった有坂先生のお人柄には私も色々お教え頂くことがございました。あらためてなつかしく思い出しております。

お暑さの折り柄、どうぞお体ご自愛下さいませ。

かしこ

有坂文雄様

(平成十六年八月)

朽木正子様からのお言葉

有坂先生と、会が終わってから楽しくお話しした事等、なつかしく思い出されます。

ある時、いちぢくに梅酒をかけて冷やして食べるとてもおいしいのよ、と教えて頂いたので、家に梅酒がたくさんありますので、と差し上げましたら、お嫁さんのお里が伊賀上野とかで、行って来ましたので・・・とお土産にさんしょの実の入った可愛い壺のお土産を頂きました。

今でも、記念に大切に取っております。

朽木 正子

河内幸子様からのお言葉

昭和五十七年頃でしょうか。先生の附属小学校の時のお友達に植木の竜宝寺というお寺の御住職がおられ、お願いして、お部屋をお借りして頂き、北鎌倉分会の例会をさせて頂いたことも思い出されます。

以下は鈴木寿子さん(ご入院中)からの「有坂さんの思い出」の伝言です。

先生のお姉様が浄明寺にお住まいでしたので、よくお買い物なさっていらつしやったようです。お帰りに疲れてしまわれて、鈴木さんのお家に寄られるので肩をもんで上げたりしてあげました。笠間の近くにお住まいの時にお電話で、転んで動けないのよとおっしゃったので、茅木やのうなぎの蒲焼きをお届けしたこともあるとのことでした。

参考資料 1

夫磐雄の母敏子（注1）より言子への手紙

（昭和二十八年九月十二日付）

先日は御用多ことに御遠路の處をわざわざ御出で下さいましてまことに有難う存じました、ふみおちゃんにも初めてあいますことが出来ましてうれしうございました、おかげさまで終日にぎやかにくらししました、又何よりのお祝いをいただきまして恐入りました、私事毎朝六時頃におき出でまして 七時にねますから一日の内半分八ふとんのなかでくらししますからおふとんの御祝いは大へんに嬉しう御座いました 厚く御礼申上ます、また御丹精のめづらしいお花いろいろいただきましてこれ又あり難う御座います、遠方のこと故途中のお心づかいも大へんでございましたでしょう、おかげさまで西洋の朝かおといふものを初めて見ました、昨朝はむらさきが五つ見事に咲きました、くもりのお天気でございましたので午後三時まで咲ておりました、

九月十二日

母より

磐雄様  
こと子様

（東京都世田谷区三軒茶屋町八六

有坂とし子）

注1 敏子〓海軍造兵総監前田亨の次女

注2 「父上」は夫の 蔵。有坂 蔵〓

東京帝国大学工科大学造兵学科一期生。  
卒業後海軍に入り、直ちにフランス・ル  
アールに留学して大砲の設計を学んだ。  
呉の海軍工廠長と東京帝大教授を併任。  
海軍造兵中将。昭和十五年著書「兵器沿  
革図説」に対して学士院賞受賞。（十歳  
の頃、義兄の石川千代松に連れられて、  
当時東京帝大本郷キャンパスに滞在して  
いたモースをしばしば訪れ、考古学に興  
味を持った。十五歳の時、現在の文京区  
向ヶ丘で弥生式土器を発見。）

四時頃にしばみ始めました、今朝は赤が一つとむらさきが五つ咲きました 只午後二時でございませすが一つも志ばみません 朝顔はたしかに三つ咲きますから楽しみにして居りませ、ダリアも三つながらきれいで父上様（注2）と秀（注3）の靈前に供えてご座います、

言子様の御父上様にも頂戴をいたしましたして恐入りました まことに御達筆にて御高齢の御方とも思はれません 大切に大切にいたします どうぞよろしく御礼御申上下され御自愛遊しますように御傳えねがい上ます、磐雄さんのおできかがでございますかと案じております、だいぶ鎌倉へのお帰りがおそくなりましてたことと思ひます お留守は大丈夫でございましたか、文雄ちゃん途中からねむくなりまして事と存じます、今川母上様どんな御様子でいらつしやいましたか、おついでの時一寸お志らせ下さいませ

それでは皆々様御機嫌よろしくお過ごし下さいませ、御礼まで かしこ

注3 有坂秀世〓国語学者。音韻論における業績により、昭和二十七年学士院賞受賞。同年結核のため死去。享年四十三歳

参考資料2

従妹の三浦節様（注4）から言子への手紙  
（昭和五十九年七月三日付）

いつもご無沙汰のみ申し上げてをりました  
が、久しぶりお手紙と共にとも子へのお見舞  
いをお届け頂き誠に有難う御座いました。冬  
のきびしさも格別でございましたが、その後  
の気候の移り変わりの不順なことあきれるほ  
どでございましたが、お元気で誕生日もお迎  
えのよしおよろこび申上ます、先日謹一郎  
札幌で文雄さんに色々お世話様になりました  
ことと存じ御礼申し上げます。その折とも子  
の事お話し上げたそうでご心配おかけしてし  
まいました

（中略）

いただいたお人形大変よろこびいつも自分の  
すわるころにおいて楽しませていただいて  
をります。くれぐれもよろしく御礼申上げ  
よう申してをります

（中略）

四年ほど前に孫息子三人が次々高校、中学と  
学期の都合のよい時ボツボツと東京に移り  
（はじめ一年間次男高校入学の時私があづか  
りました）長男は高校まで三島で通しました  
のでその卒業と三男が中学に入る時母親も一  
緒に東京に移り私も一人で住んでいた家を謹  
一郎の家を貸してあったオーストラリア人夫  
婦にゆづつて（一人住居のせまい家なので二  
階を建てました）入れ代わり隣の謹一郎の家  
に私の部屋をたてまして一緒に住むようにな  
り謹一郎一人三島に単身赴任の形となりま  
したが、週末には東京に帰りまして私も一家  
団欒もよいものだと思つてをりますうちに昨  
年四月謹一郎が東大工学部工業化学科の教授  
となり同時に三男の大学入学、やっと一家が  
そろつてめでたしめでたしと思つてよろこん  
だとたん嫁の大病で、やはり神様はよいこと  
ばかり下さらず試験も下さるものをつくづく  
心に思い知らされました

（中略）

夏休みになりましたらお友だちとのつき合  
いで旅行に行きますけれどなかなか何かと手

が出来る事と思つてをります。次男の嫁は横  
須賀時代の清泉を小学校から大学まで通学し  
た人ですからやはりカトリックのぎせいの精  
神で実によくやつてくれますので感謝してお  
ります

末筆ながら成川様にも のぶ子さん、敬子  
さん、蘭子さんもお元気でいらっしやいます  
か。おついで節よろしく、梅雨明けました  
ら急にお暑くなることと思ひますがどつぞ呉  
々も御体御大切に、延引ながら御礼まで  
か  
しこ

七月三日

節

言子様

注4

三浦節は言子の従妹。父は言子の  
伯父にあたる竹下勇（海軍大将）。  
母によれば幼い頃によく鎌倉の浄明  
寺に遊びに来られたとの事。



参考資料3（昭和八年十月、言子の弟讓の死去に際して父敬讓が読んだ漢詩）

輓歌

長松如眼偃海道  
輿疾乘曉踏青稻  
朝陽漸出房総山  
照盡心身清光好  
一片精神猶依然  
兎齡應同函谷老  
歸來一路斷腸思  
路邊既看發秋葵  
裏葵零露萬珠冷  
日色黯如窺寢帷  
東海道中留新賦  
蒿里還驚烏雀悲  
人生假雖如朝露

長松ちようしょうの如ごとく海道かいどうに偃よこたわる  
輿こしは疾はやく曉あけに乗のりじて青稻せいとうを踏ふむ  
朝陽あさひ漸しだく出でず房総ぼうそうの山  
照てし盡つくして心身しんしん清光せいこう好よし  
一ひと片ぺの精神しんせい猶なほ依然いぜんたり  
兎齡じれい應まさに同おなくして函谷かんこく  
歸來きらい一ひと路ろ斷腸だんちやうの思しい  
路邊ろへん既すでに看みる秋しゅう葵きの發はつするを  
裏葵りぎ零露れいろう萬まん珠じゆ冷れいやかなり  
日に色しき黯くく窺うかがう寢帷しんいを窺うか  
東海道とうかいどう中ちゆう新賦しんぷを留とどめ  
蒿里こうり還ま驚あく烏雀うさくの悲かなむを  
人生假にんじやに朝露あさるうの如ごとしと雖いえども

蒿里（泰山の南にあるといふ山の名）

老少易迷九原霧  
黄昏忍見燈火青  
夏雨秋風十旬痼  
倚門再莫望子歎  
誰截烏林反哺樹  
紅顏荒涼陽谷丘  
孤墳何處龍寶路  
黃菊時節懶裁詩  
供花壇前代誄句

老少迷まい易やすし九原くわんげんの霧  
黃昏こうこん忍しのび見みる燈火とうかの青  
夏雨なつあめ秋風あきかぜ十旬じゅうじゆんの痼こ  
門かどに倚よつて再またび子この歎なげきを望のぞむ莫なれ  
誰たれか截たたん烏林うりん反哺はんぼの樹じゆ  
紅顏こうげん荒涼あうりやう陽谷やうこくの丘かみ  
孤墳こふん何いずれ處ところか龍りゆう寶ほうの路ろ  
黃菊わうこくの時節ときせつ裁詩さいしを懶おこた  
壇前だんぜんに花はなを供ともえて誄さい句くに代かえん

九原（墓場）  
黃昏（たそがれ）

痼（長く治らぬ病氣持）

反哺（口中の食を返す）  
長し（反哺して老母を養う）  
誄（人の生前の功徳を述べたもの）

(\*) 書き下し文は山本治夫氏による。

(言子の父敬讓が八十歳の時に子供達に残した回顧録)

## 示 児

予は明治二年己巳夏東肥菊池川のほとり高瀬永徳寺の仮居に生る。幼名を得二といふ。家はもと常府にて江戸にて鳶細川と云ふ小藩の臣二百五十石の用人格なりしが王政維新に際し藩を挙つて下縣し三年の秋岩崎原に移りたりしが母磯子刀自痢病に罹りて身没す冷き乳房に縋れる稚児また感染して危うかりたるが父敬簡居士の鞠に食効あり四隣の同情は蜂蜜と葛湯となりてこの世の者となる幼にして朱子の教を受けたれ共疎枝大葉章句を修めず腕白放縦お山の大將たりしが丁丑の歳自明堂の楼上より遙かに吉次峠を越へてて戦死す当時彼我叢射の銃丸昨今猶掘し余亦三弾を有す

熊本城の焚煙を望む翌二十二日夜四更に至り十四歳の姉国子十一歳の禮敬と予とを伴ふて西走し二十七日に至り更に里余の家ひの家に避く途に小倉砲兵隊が高瀬に向ふに逢いたりしが薩軍に襲はれ銃丸砲弾予ら三子の頭を掠めて飛べるを記す三月中旬岩崎原の故宅に帰りしが会々長姉婿たる六尺豊かの東京巡查大田原専八れ植木駅付近において野津鎮雄少將之を奪還せり童謡曰く東京巡查と赤隊なけれや信雄が田原坂の戦に加はらんとして我家を過ぐ之を予が実践場裡華のお江戸に躍り込む

丁丑の乱篠原國幹此峠に

此日永徳寺砂天神にて南州末弟西郷小兵衛戦死

田原坂八攻防戦五十余日に涉り乃木聯隊旗敵に

石神氏は北里博士に従い香港に

明治二十五年に赴きベストを研究せられ全世界その恵に浴せるが氏はその病毒に冒されたり

明治二十五年に赴きベストを研究せられ全世界その恵に浴せるが氏はその病毒に冒されたり

日侍従武官斎藤孝至を差遣はされ

天皇陛下より金巻封 皇后陛下より御製三角巾。包帯。ガーゼ

を賜はる次に柴山琴子相浦辰子大森長崎縣知事佐世保

村長等来り慰問品をおくりたる癒後再出征せしが二十九年秋英国

出張被仰付新城安社にて製造の戦艦八島を受領し三十年十

一月晦日帰朝せしが直ちに郷友たる国民新聞社副社長阿部

充家を帯同し八島大写真駝鳥卵をもたらして勝海舟先

生を訪ふ先生はさきに御下問の我海軍国策に対する奉答

文又最近李鴻章より清国戦後の政策諮問に答ふる案

を示され精進料理の午餐を共にし午前十時より后二時におよ

び清談尽きざりし

形勢危うかりしが彼我速力の差により難を脱せり翌二十八日払暁第三討伐線に於てネボカトフ戦隊に迫りし時は天候昨日に異り晨光清爽水平線の八方より旭日旗沓至して之を威圧し之を倒せり真に一世の壯觀なりし此日もまた終日敗残の敵を掃蕩せしが二十九日午前二時十五分月出で四時五十分に至り駆逐艦連が敵の首将ロゼストウエンスキー提督を其幕僚と共に駆逐艦ベドウ井イに於て生擒せるを発見し無線電信にて之を東郷聯合艦隊司令長官に報告し命により明石之を先導して佐世保に護送して捕獲審検所に引渡せり正に明治三十八年五月三十日午后二時なりとす此海戦は日露戦役の大団円にしてロマノフ朝は遂に滅亡するに至りセオドルルーズベルトも我戦果の偉大なるをさとりて終極を焦るに至れり  
却説世は治りたれ共人の心は刈の如く群小乱舞し党同異我を事とする傾きあり元来予は將校志望にて兵学校に入りたるが日清の事急なるに当り当事者は機関官の不足を補ふがために十九期生を半截して機関官に任用せしが機関官の先輩は予等を異分子視す於是予は横須賀水雷戦隊機関長として其戦闘運転に当り十五分間の余祐を五十四秒に短縮して薄書尊者の蒙を拓き胆を破りたるを最期として攀を出づ予は時に四十五歳なり爾後悠悠後半生を送らんとせしが積宗演老漢は予を觀相して座禅を勧め工学博士小山吉郎造船少将は旦座を説き比田井天頼翁は王義之を語り海軍少将福井無門居士は杜甫に誘ふ三面六臂亦難しといふべし

昭和二十二年秋予が正気歌成る蓋し戦破れて經濟其方を誤り物価徒らに昂騰して人心惟危く道心惟微となり政体は変わるも 国体は千秋万古なるを覺らざる者あり茲に時艱にして偉人を思ふなり

昭和二十三年戊子歳旦

八十叟冬青庵誌 敬讓印

## 編集後記

母が御殿場の高原病院に入院する二ヶ月程前の日曜日の午後、いつものように母を訪ね、二人で昔のことなど話しておりました。私は何気なく「お母さん、子供の名前みんな覚えてる？」などと聞いてしまいました。「そうですね。」と心細そうな母にヒントを与えながら、長兄の英雄から弟の信雄までなんとかたどりに着いたとき、母は「みんな私の子だったかしら。」と聞くのです。私は、「お母さんが生んだのは僕と信雄。恭子姉さんから上は前のお母さんの子供だよ。」と申しますと、母は「でも私は、あんたたちとほかの子と区別なんかしたことがなかったのよ。」と言いますので、「そうか、だから兄さんも姉さんもみんな今でもお母さんのことをとても大切にしてくれるんだね。」と申しますと、母は何も言わずにちよつと恥ずかしげに嬉しそうな笑みをたたえておりました。

その母が御殿場病院に入院後 しばしば

「追憶」は完成していないと思うようになり、「追憶補遺」として再び小冊子にまとめることに致しました。また、何人かの方にはこの機会にお願いして書いて頂きました。唐突なお願いに快く答えて下さいました方々に心より御礼申し上げます。

文をお寄せいただいた方々以外にも多くの方々のご厚意を頂きました。山本治夫氏には祖父松沢敬讓の「挽歌」の読み下しと解釈を、河島正光氏には「示児」の読み方をご教示いただきました。いずれも従妹の堺万里子の紹介によるもので、この場をお借りして堺万里子にも深くお礼を申します。

最後に、晩年の母を長きにわたって世話してくれた弟の信雄に心から感謝します。

(文雄 記)

「鎌倉の家にいる小さな子は元気かしら？」と聞き、その子のことが気になっていようでした。しかし、母にそれが誰かを聞いても思いだせないようで、私も気になりながらそのままになってしまいました。しかし、今回、中野ノブ子様がお書き下さいました、「邦彦さんと有坂先生」を読ませて頂きました。これは邦彦のことだったに違いない、と思うようになりました。私は邦彦についての記憶はありませんが、母から「お利口だった邦ちゃん」について何度か聞かされたことがあります。

「追憶」をお読み頂いた方から思いがけず母の思い出を綴ったお手紙などを頂き、私もが余り知らなかった母の別の面を教えて頂きました。近過ぎて見えなかったものに気づかせていただきましたが、それにもまして、母がなんと多くの方々に支えられて人生を歩むことができたことか、ということに気づかせて頂きました。これらの文やお手紙を読ませていただくうちに、これをまとめなければ

追憶(花と鳥と歌と)補遺

非売品

発行代表者 有坂英雄

編集 有坂文雄

二〇〇四年十月一日

